石井･ドーマン方式の効果

「石井･ドーマン方式」の第一の効果は、情緒の安定が得られることです。研究所を訪れる障害児･問題児の多くが、情緒安定のよりどころを失って、不安そうにおどおどしたり、反発したりしていたのが、一対一のこの指導で、初めて情緒の安定が得られ、解決に向かいました。

それには、その子供の現在あるがままの姿、そのままを教師が受け入れることにより、その子供もまた教師を受け入れてくれるという前提が必要だと思います。子供の問題を余りに意識し、矯正しようと思って接すると、子供は抵抗することが多いようです。そういうことを忘れて、無心に“書かれた言葉”の指導に当たることです。

効果の第二は、言葉の定着が早いことです。その子供にとって、初めて教えられる言葉が、話し言葉と同時に“書かれた言葉”で与えられると、定着が早く、しかも確実なのは、視覚と聴覚との両器官が関与するためです。

アメリカの学者の研究によりますと、聴覚だけによる記憶を 1 とすると、視覚による記憶はその 2 倍、視･聴覚両方による記憶は 5、6 倍も大きい、と報告されています。

効果の第三は、言葉の発達に伴う人間性の成長です。人間は言葉によって物を見、物事を考えるのですから、言葉の発達が、人間性の成長を左右するのは当然です。

「この子には、わかる言葉がないのです」と母親に言われている子供でも、漢字を与えてその漢字が何を意味するかを教えてやりますと、直ちにそれを理解して、それを音読することはできませんが、漢字に対応する具体物を正しく示すことをします。これは、漢字が“内言”として働いていること、つまり、思考が働いていることを示していると思います。

効果の第四は、集中力がつくことです。これは、“書かれた言葉”が絵とは違って、物その物を直接に表現したものではありませんので、それを読み取るためには、注視し、頭の中で比較、分析、統合等の活動をしなければなりません。だから、自然と集中力がつくようです。

そこに、漢字カードを見せて、これを読ませるのと、絵カードを見せてそれを言わせるのとで、子供の頭の活動に違いがあり、従って教育効果の違いが生ずるわけです。

効果の第五は、前述の情緒の安定、言葉や集中力の発達、及びそ

れに伴う人間性の成長によって、知能が向上することです。漢字が読めるようになりますと、単に本が読めるということだけでなく、自分の周囲の事象をも、情報としてこれを吸収しよう、という態度までできてきます。

入所当時は、特殊学級か養護学校でなければと思われていた子供が、知能ばかりか各種機能も発達して、普通学級に入り、普通児と少しも変わることなく、各種の学習を進めている例がいくつもあります。

効果の第六は、発語指導に適していることです。子供に言葉を言わせようとする“話し言葉”だけの指導では、「〇〇と言ってごらん」というように強制になって、子供によっては抵抗して、言えるのに言わないことが多いのです。

研究所には、他の施設で言語治療を受けて効果がなかった、ということで訪れるものがよくあるのですが、そういう子供たちのほとんどは、強制による抵抗感を持った子供たちです。

そういう子供でも、漢字を覚えて、その覚えた漢字を「これなあに」と言って尋ねますと、まったく何の抵抗もなく、極めて自然の調子でそれを音読してくれます。だから、その音読を重ねることによって、発音も自然に正しくなっていきます。

効果の第七は、実はこれが最も大切なことですが、子供自身が、その気になってやろうとする意欲が一番大切だということを理解してくれることです。

「馬を川まで連れて行くことはできる。しかし、水を飲ませることはできない」という諺があります。教育のむずかしさはそこにあるのですが、この教育によって漢字が読めるようになった子供は、不思議なくらい意欲的に物ごとをするようになります。だから、それまで鈍かった目が、きらきらと輝いた目に変わります。

普通、〇〇療法とか〇〇訓練とか言われているものの多くは、せいぜい言いつけられたことに応ずることができるだけで、意欲的な子供を育てることはできないし、そういうところまで求めていないように思われます。

基本的な問題について、もっと書きたいことは多くありますが、紙面の都合で後日に譲ることにして、次に事例を上げたいと思います。